

## 南画院展出展について

南画院は、昭和21年(1946年)に、新時代の南画の普及と発展を目指して創立され、以来、77年を経ながら自然風物、それ等が持つ躍動的な生命感、格調高い心象を表現することを目標としてきた伝統ある画壇です。

出展は50～100号の水墨画等が多く、迫力ある作品が展示されています。

今回は、以下の3点を出展しました。

- ① 白銀の山稜 M100号 (162cm×97cm)
- ② 雲上の北アルプス P50号 (116cm×80cm)
- ③ 厳冬の槍・穂高 P30号 (91cm×65cm)

### ① 白銀の山稜(南画院賞)



北アルプスの五竜岳の山頂からの眺望です。

画面左上から右へ、八ヶ岳、富士、南アルプス、中央アルプスが連なり、富士の手前に美ヶ原高原が広がり、更に五竜岳山頂から右へ鹿島槍ヶ岳、彼方に槍・穂高が連なる構成です。

大画面での描写、五竜岳山頂から富士までの山稜ハーモニーを、是非とも原画で、臨場感を楽しみ白銀の世界を堪能して頂きたいものです。

この作品で、「南画院賞」の栄誉を受けることになり、今後の更なる飛躍に繋げる糧になると思われる。

## ② 雲上の北アルプス



鹿島槍ヶ岳からの眺望で、北アルプスを代表的する絶景の一つです。

鹿島槍ヶ岳から爺ヶ岳への稜線、彼方に槍・穂高が連なる構成です。

爺ヶ岳の右側には、更に立山、剣岳への山稜が繋がっており、天候に恵まれたら、圧巻の大パノラマが眺望できます。

鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳は、登りやすい山であるが、天候が崩れると周りに遮るものがないので、一気に風雪に晒されて、危険極まりない。

5月、ゴールデンウィーク登山の際、天候が急変して風雪でホワイトアウトになり、全く影のない状況に陥り、足元の起伏、周囲の雪原も判別できず、一步も身動き取れずに、天候回復までその場にテント拍、滞留したことがあります。

天候回復後、周囲の状況は一変しており、真っ白にドレスアップした鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の山稜は、神々しく何物にも替え難い素晴らしい白銀の世界であった。

春先から5月初旬の天候は、安定せずに急変することが多いので要注意です。

また、ホワイトアウト状態に陥ると、精神的な疲労が急激に発生して、幻覚により前方近くに登山者の人影を見たりして、本来のルートから外れて遭難に至る恐れもあるので、その場で天候回復を待つのが、大事に至らない最善の策です。

## 参考画像



天候回復後の鹿島槍ヶ岳



## ホワイトアウト

風雪で太陽光が遮断されて、周りの影がなくなり、真っ白な雪原では、雪上の起伏、物体の形状の判断が非常に難しくなる。風雪が激しくなる全く見えなくなり、薄暗く白っぽい空間の中に、閉じ込められたような状況になって、非常に危険な状態となる。

## ② 厳冬の槍・穂高



槍への眺望は、奥穂高と涸沢岳の山頂からが好きで、何回か描いているが、これからも描いてみたいと思っている。

今回のものは、奥穂高から涸沢岳、北穂高、大キレットを介して槍に至るダイナミックな山稜であり、君臨するがごとき槍の山嶺に至るものである。

本格的な雪山登山を始めたのは、穂高であり、アルピニスト青木昭司氏にガイドをお願いして、穂高山稜を縦走した。

青木氏は、国際的にも卓越した登攀実績を持つアルピニストであり、海外でのガイド実績を下に、日本でのガイド手法等の改善に貢献されており、又、最近NHK番組で山岳ガイドの出演でご活躍されている。

ゴールデンウィークの残雪期に

北穂高東陵(ゴジラの背)→北穂高→涸沢→奥穂高→前穂高釣尾根(滝沢)→岳沢  
のコースでガイドをお願いして、雪山登山のご指導を受けた。

圧巻は、ゴジラの背のエッジ状に尖った雪庇先端の登攀、涸沢岳稜線でのルートファイリング、更に前穂高釣尾根から急傾斜の滝沢雪渓を直降下しての岳沢への下り。

その時学んだ登攀技術は、その後の冬山登山において大いに役立っている。

## 参考画像



ゴールデンウィーク時の槍・穂高



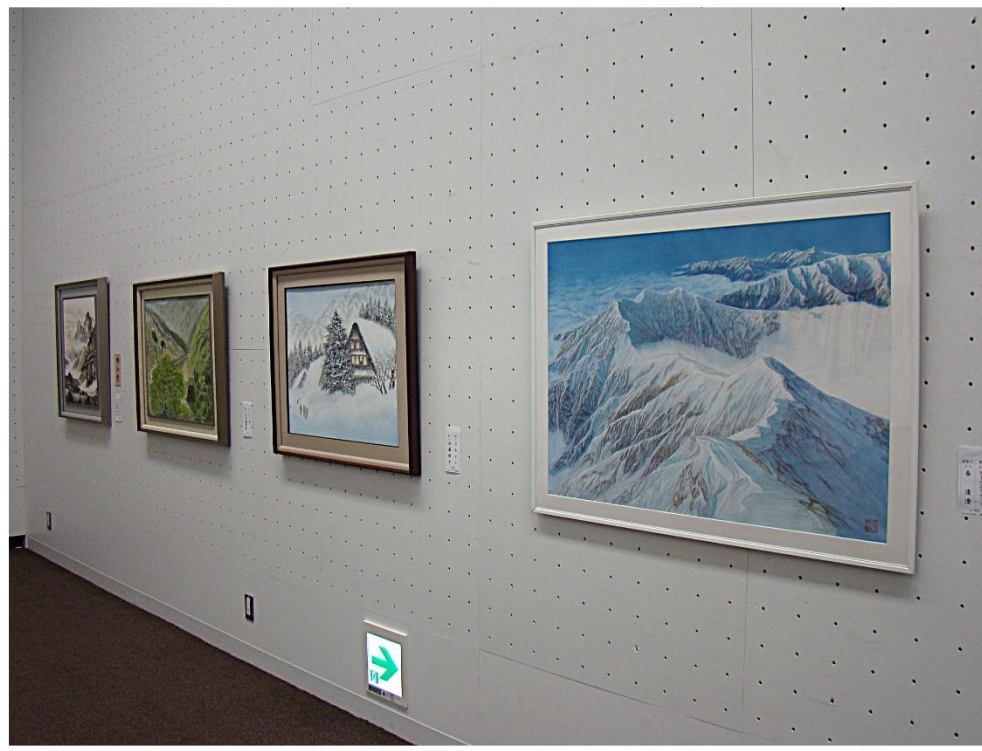
ガイド青木昭司氏

青木氏は、雪上の稜線において、ピッケルではなく、ストックを使用しており、理由は雪崩等に遭遇した時、直ちに救出するのに必要であるとのことであった。

ガイドをお願いしたのは20年位前、その後、西穂高で女性の方ガイド中の青木氏と遭遇、ご挨拶させてもらった。

今でも憧れのアルピニストであり、これからもご活躍を期待しております。

展示会場内





南画院賞  
院友推荐

2011年  
中国书画函授大学  
天津分校  
建校二十周年纪念册